

東北文化学園大学・比治山大学
IRに関する相互評価報告書

平成 29 年 3 月

東北文化学園大学・比治山大学

IR 相互評価の実施にあたって

比治山大学・比治山大学短期大学部

副学長 谷川 宮次

大学にとって IR(インスティテューショナル・リサーチ)とは、入試、教育、経営等の情報を含む大学内部の様々なデータの入手や分析と管理、中・長期計画の策定、大学の教育プログラムの点検・評価など包括的な内容を意味するので、まさしく大学の「意思決定の支援情報」を提供するための活動ということになる。

本学においても、2014年7月に大学運営戦略本部のもとに「比治山大学インスティテューショナル・リサーチ委員会」を教職協働という形で設置し、委員会の目的も「本学運営のための計画策定、政策決定、意思決定を支援すること」と明確にした。

それ以降、入試広報室、学生支援室、キャリア支援室、学長室等、各部署におけるデータの収集や整理・分析といった業務を連動させ、組織的な活動が進めることになった。また、IR 委員(職員)のスキルアップも進め、分析ツールの操作のみならず、問題提起から提言・提案へ至る展開力の向上も図った。その成果は、執行部への定例報告、教員研修会やフォーラムでの発表となっている。

しかし、IR の推進については、昨今のセミナーや研修会の盛況ぶりからすると、今なお、大学自体がその方向性に確信を持たず、学内での共有・定着が途上であることが窺える。それを克服するための一つの方法として、IR の体制・活動・成果等を他大学と比較して客観化、相対化しながら問題点を見つけつつ改善すること、つまり IR の相互評価が浮上している。

そんな折、平成 27 年 8 月に東北文化学園大学より視察があり、取り組み内容について意見交換を行った。IR 室員が分析した結果をどのように施策に結びつけるかということは本学でも喫緊の課題であった。翌年、本学が東北文化学園大学を訪問し、ファクトブックの作成や、データの公開・利用に関する手続き等、有益な情報を得ることができた。

そのご縁で、さらに一步踏み込んで、IR の相互評価についてお願いしたところ、快く引き受けていただいた。

相互評価の最大の成果は種々な観点からの自大学についての思わぬ発見であり、新しい展開への参考資料、出発点になるはずである。大学間の信頼関係に基づいて、大学間で可視化された情報を共有し相互評価をすることが重要である。それによって、自大学が提供する教育やその成果の強み、弱みを視覚的に把握することが可能になり、その結果を教育改善や質の保証に結びつけていくことができる。

両大学の関係者の真摯な協力のもとで行われる相互評価が両大学の IR の発展、ひいては大学の質の向上につながることを期待したい。

1 相互評価の経緯

平成 28 年 10 月

下旬、比治山大学学長室長より、東北文化学園大学総務部部長あて電話にて、I R に関する 2 大学間の相互評価について打診があり、平成 28 年度に相互評価を受諾する意向を 11 月 1 日に回答した。

平成 28 年 11 月～12 月

比治山大学と東北文化学園大学が、相互評価協定書案及び実施要領案について書面協議を行った。

平成 29 年 1 月 10 日（火）

両校間で、相互評価協定承諾書を取り交わし相互評価実施要領を確認した。

平成 29 年 1 月 31 日（火）

両校が実施要領に基づき自己評価及びエビデンスを作成し相互に交換した。

平成 29 年 2 月 17 日（金）

比治山大学相互評価担当者が東北文化学園大学を訪問し、相互評価実施要領に基づいて 2 大学で相互評価会議を開催した。

平成 29 年 3 月 17 日（金）

両校間で評価案を交換し、それに対する意見交換を行い、評価が終了した。

平成 29 年 3 月 24 日（金）

相互評価報告書の冊子を作成した。

平成 29 年 4 月

評価結果の公表を行う。

2 相互評価協定承諾書

東北文化学園大学と比治山大学
I Rに関する相互評価協定承諾書

双方で相互評価を実施することに同意いたします。

本承諾書を交換し、I Rに関する相互評価実施について、平成 28 年度中に終了すべく遺漏のないよう努めることといたします。

平成 29 年 1 月 10 日

東北文化学園大学
学長 土 屋 滋 印

比治山大学
学長 二 宮 皓 印

3 相互評価実施要領

平成 29 年 1 月 10 日

東北文化学園大学と比治山大学との間における 相互評価実施要領

I 相互評価の実施校

東北文化学園大学
比治山大学

II 目的

東北文化学園大学と比治山大学とは、それぞれの大学で行った I R に関する取り組みについて「相互評価」を実施し、その結果を公表し、以て I R の充実を図るとともに、両大学教育の一層の質的向上を図ることを目的とする。

III 評価対象年度

平成 26 年度～平成 28 年度の 3 年間

IV 相互評価項目

- (1) 情報収集
- (2) 情報分析
- (3) 政策提言
- (4) 施行支援
- (5) 組織体制

※各項目の基準は、両大学で話し合うものとする。

V 相互評価の実施方法

両大学の自己評価に記載されている上記項目について相互評価を行う。評価を行うに当たっては、自己評価及び関係資料等を交換し、併せて両大学評価担当者が会し、相手校の現状や課題等を正確に把握するものとする。

VI 相互評価に関わる日程等

両大学の協議により決定する。

VII 相互評価のまとめ

以下の項目をまとめ、相互評価報告書を作成する。

はじめに

- 1 相互評価の経緯
- 2 両大学の I R の主な取り組み
- 3 I R 関係委員会規程
- 4 相互評価担当者名簿
- 5 相互評価協定承諾書
- 6 相互評価実施要領
- 7 評価基準（細目と視点）及び記録
- 8 自己評価
- 9 相互評価結果

あとがき

VIII 相互評価会議の構成

- (1) 両大学の相互評価担当者によって構成する。
- (2) 議長は互選とする。
- (3) 議事録を作成し、相互に内容を確認する。

IX 情報の使用，守秘義務および個人情報

本相互評価を通じて収集した情報は厳重な管理のもと、相互評価の目的のみに使用することとし、公表する以外のは守秘義務を負うものとする。また、本相互評価では個人情報は取り扱わないものとする。

以上

4 評価基準（細目と視点）

評価項目 ¹	評価細目	評価の視点
1 情報収集	<ul style="list-style-type: none"> ・データ基盤整備（システム、統合・リレーション、ツール） ・データソース（学生調査、DB） ・データ項目 	<ul style="list-style-type: none"> ・データの連動が図られ、継続性のある基盤（システム）が構築されているか。 ・信頼性の高い、客観性のあるデータを収集しているか。 ・データ項目は十分か。
2 情報分析	<ul style="list-style-type: none"> ・分析 ・活用・提供（要請レベル） 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題を認識し、それに応じた分析となっているか。 ・要請に応じて分析結果を提供しているか。
3 政策提言	<ul style="list-style-type: none"> ・意思決定機関（組織）との連携 ・意思決定への反映 	<ul style="list-style-type: none"> ・意思決定機関とIR組織の連携の方法、頻度はどうか。 ・意思決定に資する分析となっているか。 ・施策へとつながっているか。
4 施行支援	<ul style="list-style-type: none"> ・効果測定、指標開発 	<ul style="list-style-type: none"> ・施策の効果測定はできているか。 ・施策への支援が行えているか。
	<ul style="list-style-type: none"> ・情報公開、(認証) 評価、質保証 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報を公開し、ステークホルダーや認証機関等からの評価を受けているか。 ・説明責任に資するものであるか。
5 組織体制 ²	<ul style="list-style-type: none"> ・IR組織の位置づけ、機能 ・職員協力体制 ・教職協働体制 	<ul style="list-style-type: none"> ・位置づけが明確か。 ・機能を発揮しているか。 ・事務部門間でのIRの認識が広がり、協力体制を構築しているか。 ・教員との協働体制は構築されているか。
	<ul style="list-style-type: none"> ・職員の専門性³ <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; display: inline-block;"> <ul style="list-style-type: none"> ・技術的分析的情報力 ・問題情報力 ・文脈的情報力 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・職員の専門性（知識、技能、能力）は向上しているか。 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; display: inline-block;"> <ul style="list-style-type: none"> ・基本概念を理解し使用する力（情報収集力、調査統計手法、分析力、ソフトウェア技能、データベース知識、プレゼンテーション力、コンサルテーション力、情報セキュリティ知識など） ・問題を発見し戦略的計画との関連を理解する力（課題認識力、仮説構築力） ・高等教育全体や自大学の文化を理解する力 </div>

5 相互評価結果

東北文化学園大学に対する評価（比治山大学）

評価項目	評価	
1 情報 収集	概評	情報収集については、IR 室が学生データを所轄する部署からデータを収集し、それを学生 DB として管理・活用すると同時に、「学内データマップ」によりデータの原籍管理を行っている。各種アンケートデータ等も個別に収集・管理しており、学生情報について長期的かつ多面的に網羅し保存・整理されている。
	評価できる点	<ul style="list-style-type: none"> ・「学内データマップ」によるデータの原籍管理や「個人情報申請書」によるデータ集約など、IR 室によるデータ管理が行き届いている。 ・1999 年度以降 250 を超えるデータ項目が整理され、活用できている。
	今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・データの管理方法について、IR 室での一元管理、各部署での分散管理、あるいはハイブリッド管理とするかなど、データ項目の統合・連動に関する方針の確立と、さらなる効果的かつ効率的なデータ収集のシステム化が図られることを期待する。
2 情報 分析	概評	情報分析については、大学のファクトブックである「東北文化学園大学資料集」を刊行・提供しており、ここでは情報の経年変化を中心に分析・整理している。同時に、各部署からの資料提供・分析依頼にも対応している。
	評価できる点	<ul style="list-style-type: none"> ・平成 27 年度から刊行・提供している「東北文化学園大学資料集」では、分析結果が整理され、グラフ化などにより見える化が図られており、長期にわたる傾向が分かりやすく提供されている。
	今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・IR 室の情報分析における役割として、学内情報をベースにした分析・提供の組織化はなされているので、つぎの段階における役割を構想して、いくつかの手法をもって多面的な分析が展開されることを期待する。
3 政策 提言	概評	政策提言においては、政策の構築に資するよう、経営懇談会のような経営レベルから中途退学者データ分析報告会のような特定問題レベルまで、幅広く情報を提供している。特に中途退学者減少対策に関しては、より具体的な政策提言を行っている。
	評価できる点	<ul style="list-style-type: none"> ・経営懇談会や教職員全体集会等に詳細な資料を提供しており、その情報・分析は政策に資するものとして全学的な期待と信頼を得ている。 ・中途退学者減少対策に対しては、分析結果から予測を試みており、

		施策につながる提言ができている。
	今後の課題	・中途退学者データ分析報告会で政策提言を行っており、他の分析においても、こうした提言から施策への展開、つながりが明確化されることを期待する。
4 施行 支援	概評	施行支援については、PDCAサイクルにおけるチェック機能を果たしている。中途退学者データ分析を利用した学生支援については各学科に対しアンケートを行っている。また、学内イントラに IR 室ページを設置したり、エビデンスとなる資料を作成するなど、全学的な観点で信頼を得ようとしている。
	評価できる点	・提言に対するアンケートを実施し、そのことに対する分析を行うなど効果測定を積極的に推進している。 ・学内イントラに IR 室ページを設置し、学内向けに情報の提供を推進している。
	今後の課題	・課題に対する効果測定モデルの開発及び、認証評価活動への支援やステークホルダーを対象とした情報収集・提供、外部評価等も視野に入れることを期待する。
5 組 織 体制	概評	IR 室は理事長のもとに置かれ、その位置づけは明確である。活動は教職協働体制で進められ、職員育成は適切に行われている。とくに職員レベルでは「教学改善 IR チーム」を組織して活動が行われ、諸課題における連携が図られている。また、個々の職員育成においては、統計分析の研修を実施し、データ分析の専門的知識、技能の習得を目指している。
	評価できる点	・教職協働、職員間連携が図られており、データ活用技術や統計分析法については研修会等でその技量を高めると同時に、一般の教職員にも働きかけるなど全学的なレベルで浸透させようとしている。
	今後の課題	・分析ソフトなどを利用した課題、仮説設定を行うことができるようさらなる職員の力量向上を期待する。 ・今後、政策提言機関として教職協働を発展させた実質的な連携体制が構築され、施行支援へとつながるよう期待する。

比治山大学に対する評価（東北文化学園大学）

評価項目	評価	
1 情報 収集	概評	<p>GAKUEN システムと QlikView とのデータベースリレーションによって I R システムの構築が実現され、データの一元管理がなされており、十分なデータ項目が備えられている。</p> <p>データクレンジングが課題となるが、I R 委員会の構成員のうち、管理者研修を受けた 2 人の職員が総合的なデータ管理に携わっており、2011 年度以降のデータは適切に活用できる環境が整備されている。</p>
	評価できる点	<ul style="list-style-type: none"> ・GAKUEN システムと QlikView とのデータベースリレーションによって、入試広報・教学・キャリアの安定したシステム構築が実現され、データの一元化ができています。 ・I R 委員のうち管理者研修を受けた 2 人の職員が総合的なデータ管理に携わっており、適切に運用されています。 ・GAKUEN システムと QlikView によって、リアルタイムの情報が活用できる環境が整備されています。 ・システムに蓄積されているデータのほか、個別のアンケートデータを収集し、システムデータと結合できる体制を整備しています。
	今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・GAKUEN システムに蓄積されたデータの信頼性を担保するため、データクレンジングを過年度に渡って実施されたい。
2 情報 分析	概評	<p>G P A のデータを軸に仮説に基づいた分析が綿密に行われており、教学（質保証）に活用されている。</p> <p>G P A 以外の分析事例を増やすことが課題となるが、G P A 分析の結果は教員研修会で発表され、教員への問題提起及び共通理解の促進に寄与している。</p> <p>また、他部門からの依頼に基づき対応し、分析結果を情報提供する体制が構築されている。</p>
	評価できる点	<ul style="list-style-type: none"> ・G P A を軸とした分析（制度別、学籍異動別、就職決定状況別、クラブ活動）等フィルターごとの分析が綿密に行われており、教学（質保証）に活用されている。 ・分析結果は、教員研修会で発表され、全学で学生の傾向把握に取組まれており、教員への問題提起と I R 委員のスキルアップに寄与している。 ・「A P 評価指標部会」及び教学委員会の「履修単位の上限設定部会」からの依頼に基づき、分析結果について提供を行っており、教学（質

		保証) に活用されている。
	今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・GPAデータ以外の分析例を増やすことが望まれる。 ・他部門からの依頼に基づく分析結果の提供は行われているが、その他学部学科等からの個別の分析依頼への対応を整備されたい。
3 政 策 提 言	概評	<p>執行部会において、IR委員から随時報告が実施されており、大学幹部と緊密に連携が図られ、IRデータに基づく学長による意思決定が反映しやすい環境が整備されている。</p> <p>キャリア支援におけるGPA別の対応を検討するよう学長から指示するなど、政策提言に活用されている。</p>
	評価できる点	<ul style="list-style-type: none"> ・執行部会において、IR委員から随時報告が実施されており、意思決定に反映しやすい環境が整備され、分析結果の活用について検討されている。 ・執行部会への定期報告は、定期報告シートを作成し、毎月の学生に係る動向について把握しやすい工夫がされている。
	今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・多様なデータの集約及び分析を通じて、今後は政策提言を行うための分析モデルの構築が望まれる。 ・分析した結果がどのように施策・改善に活用されたかを記録し、PDCAサイクルを明確にされたい。
4 施 行 支 援	概評	<p>学生支援の視点から学籍異動の減少に向けた施策において、GPAの一定の値を指標として学生支援に活用され、その効果について測定されている。</p> <p>大学教育再生加速プログラム（AP）各施策実施後について、包括的に効果測定が行われている。</p> <p>また、紀要に定期的に投稿し、IRの活動が広く情報公開されている。外部評価及び内部評価を計画的に実施し、その評価結果について対応しており、IR活動の質保証を担保している。</p>
	評価できる点	<p>[効果測定・指標開発]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学籍異動及び休退学者の減少に向けた対応において、GPA値の指標を用いて対応し、学籍異動者減少に寄与している。 ・大学教育再生加速プログラム（AP）各施策実施後の効果について測定している。 <p>[情報公開・評価・質保証]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・紀要に定期的に投稿し、IRの活動が情報公開されている。 ・外部評価及び内部評価を計画的に実施し、評価結果について対応している。
	今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・分析結果に基づく施行支援の効果を測定されたい。

		<ul style="list-style-type: none"> ・効果測定の結果を踏まえ、今後活用できる指標の開発を増やされたい。
5 組 織 体 制	概評	<p>「比治山大学インスティテューショナル・リサーチ委員会規程」において、大学運営戦略本部の下に I R 委員会が位置付けられることが明確になっており、I R 機能が活用されやすくなっている。</p> <p>I R 委員会は、教員及び職員によって構成されており、教職協働によって取組みがされている。なお、I R に関わる職員の座談会が頻繁に開催され職員の協力体制が充実している。</p> <p>職員の専門性においては、各種研修を通じて専門性を高めるとともに、I R 委員の変更の際は、I R 新委員導入研修を行うなど充実した体制を構築している。</p>
	評価できる点	<p>〔I R 組織の位置付け・機能、職員協力体制、教職協働体制〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報提供及び意思決定に直結しやすい大学運営戦略本部の下に I R 委員会が設置されている。 ・I R 委員が異動となった場合には、I R 新委員導入研修会を実施し、I R 機能の維持に取り組んでいる。 ・I R 委員による座談会が週に 1 度定期的で開催され、協力体制が構築され、職員の I R への取組みが積極的である。 ・I R 委員会において、教職協働体制で教学改善に取り組まれている。 <p>〔職員の専門性〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・QlikView の活用に係る専門性を高める研修のほかに、プレゼンテーション研修及びコンサルテーション研修を実施している。
	今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・I R 新委員導入研修会を実施しているが、知識等の継続性を鑑みると I R 室の設置等も検討されたい。

相互評価を終えて

東北文化学園大学

副学長 佐藤 直由

この度の比治山大学との I R 相互評価は、大変有意義であった。

比治山大学から相互評価のご提案をいただいた時、東北文化学園大学 I R は、生まれて 3 年目の雛であり、相互評価に耐えるのかという心配が生じた。しかし、比治山大学での視察で得られた I R 活動の貴重な情報は、本学 I R の活動を相対化できる視点を育ててくれ、課題を明確にしてくれたものでもあり、そうした有益性をより向上させるには、相互評価のご提案を積極的に受け入れることが当然であると考えた。

幸いにも、外部評価をすでに実践されていた比治山大学から、評価項目の設定や評価方法、評価の公表などに係る手続き等についてご教示をいただいたことも大きな力となった。ここに記して感謝申し上げたい。

日本における大学 I R は、明示的にはこの 10 年くらいの間に進捗したと言われ、I R 組織や活動は急速に普及し、定着しつつあるように見える。しかし、I R の組織のあり方や活動の目的、内容は、大学の多様な存在に合わせて実に多様で個性的であると言われている。I D E 大学協会の機関誌『I D E 現代の高等教育』No. 586 (2016 年 12 月号) では「模索する I R」と題して特集が組まれており、そうした日本型 I R の現状と課題について論じられている。I R と称して行われている分析のレベル、分析結果の経営支援へのフィードバックや教育改革へのフィードバックの方法、人材面から見た I R の組織的な継続性などといった多くの課題を抱えたまま進展していることが示されている。まさに模索しながらの I R 活動なのである。

とは言え、自らの大学に関わるデータを収集し、整理、分析し、有用な情報として提示し、それに基づいて大学のマネジメントが行われるのは当たり前のことであり、I R はそれ支える機能を有していることは間違いない。大学の経営においても、教育・研究においても、社会貢献においても現状を分析して大学の全体像を把握し、将来像への合意形成と意思決定をすすめるための方法、手段として I R を構築し、活用することは重要であろう。

比治山大学と東北文化学園大学の I R 相互評価は、そうした意義を確認するとともに、I R に積極的に取り組むための協働作業である。相互評価の結果が、両大学の I R に大いに資することを願っている。

以上

東北文化学園大学・比治山大学 I R に関する相互評価報告書
平成 29 年 3 月

東北文化学園大学

宮城県仙台市青葉区国見 6-45-1

電 話 : 0 2 2 - 2 3 3 - 3 3 1 0

F A X : 0 2 2 - 2 3 3 - 7 9 4 1

比治山大学

広島市東区牛田新町四丁目 1-1

電 話 : 0 8 2 - 2 2 9 - 0 1 2 1

F A X : 0 8 2 - 2 2 9 - 5 1 0 0